

# 火打岳(ひうちだけ)

登山日:2011年11月3日

大和工営一等三角点の会

(冠字番号 - - )

成果 X=-128680.738m  
Y=- 33410.627m  
標高 1237.85m

世界座標系「測地成果2011」

点	選	明	治	21	年	7	月	-	日	選	点	者	三	原	昌	
の	造	標	昭	和	61	年	6	月	10	埋	標	者	垂	望	月	
記	埋	標	明	治	25	年	7	月	18	観	測	者	高	井	鷹	
抜	観	測	昭	和	61	年	8	月	20	観	測	者	垂	市	川	
粹	(備考) 昭和55年6月29日柱石交換、一次基準点測量										観	測	者	垂	市	川

所在 山形県新庄市大字萩野字伽室外 2 57 林班う小班

## コースタイム

土内登山口	—————	五合目	—————	火打岳	—————	五合目	—————	土内登山口
7:45	2.2km	10:10	1.7km	11:40	1.7km	13:30	2.2km	14:45
	2:25		1:30	12:30	1:00		1:15	

## 火打新道から一等三角点火打岳への山旅

一等三角点火打岳への登山口は新庄市土内の砂利押沢コースが一般的である。しかし、土内川を徒歩で渡り、砂利押沢沿いを登るコースのため、河川の増水時は登山コースとしては使用不可能な状況になってしまう。火打新道は平成4年に栗駒国定公園「自然公園指導員」の菅原富喜氏(新庄市在住)が3年の歳月を費やして開設した。別名「富喜新道」とも云われている。このコースだと、吊り橋の水路橋を利用することから、川を渡渉することなく、直接火打岳山頂に達する事の出来る最短コースと云える。

私(筆者)は、「火打新道開設」当時のニュースは耳にはしていた。しかし「登山」から遠ざかっていた時期でもあり火打新道から火打岳に登るのは、私にとっても今回が初めての体験となった。

2011年11月3日(文化の日)、ダイスケ君兄弟と3人で、「塩野原基線」の2次増大点である「一等三角点火打岳」めざして登山することとなった。

当日の朝、会社に6:30集合して車一台で出発した。途中買い物をし、登山口に到着した時は7:30になっていた。登山口には他に2台の車が駐車しており、1台は「岩手」ナンバーの車であった。



火打新道の登山口に立つダイスケ兄弟

## いきなりの「ロスタイム!!」

7:45に吊り橋を渡り、初めての「火打新道」へと歩き出した。初めての山道なのだから、一応地形図を確認すべきだった。すぐに沢を渡るはずが、道形がしっかりしている営林署の吐出沢歩道に入り込んでしまった。気づいて元に戻るまで20分余の「ロスタイム」となった。



地図を確認せず、迷わず吐出沢歩道に入ってしまった!?

## 急登が続く尾根の道を登る

改めて吐出沢歩道の分岐から吐出沢を渡り杉木立の中の火打新道を進む。すぐに火打岳から延びる尾根が沢に落ちこんだ山尻に辿り着いた。そこからは急登になった。まるで「崖地」のような斜面を見上げることとなり、その斜面の先がめざす火打岳への登山道となっている。

ロープや「<sup>かな</sup>金ハシゴ」を伝い、30分後に数本の松の木がある地点に8:50に着いた。そこからほどなくして、斜面を右手に歩を進めた。まもなく人口的に造られたようなV字型の地形が現れた。その底が登山道で200m程続いた。

汗ばんだ顔を吐出沢から吹き上げる風が爽やかに顔を撫でていく。その風に揺らされた木々からは、すでに輝きを失った落葉が「カラカラ」と乾燥した音を立てて足元に落ちてくる。一步一步踏みしめて歩く登山道には地面が見えない程の落葉が <sup>じゅうたん</sup>絨毯の様に敷き詰められている。

火打新道の序盤は、登山道でみられる「<sup>なまが</sup>七曲り」のない、「直登」の登山道である。3人がそれぞれのペースでゆっくりと、そして確実に高度を稼いでいく。

9:20に「二・五合目」と云う看板が取り付けられた地点に辿り着いた。手元の高度計では標高595m。標高1238mの火打岳山頂は、まだまだ遠い。

「二の坂」を登り詰めて、ブナの木立を通り過ぎたら突然、視界が開けた。眼下の土内川を源流へと追っていくと、その頂点に神室山が鎮座している。山々を見渡すと、その中腹より上部は落葉も終わり木々は裸木状態になっていた。その分、夏場はみられない山の地肌や無数に入り込んだ沢筋が、初冬の光に照らされて、荒々しい山の姿が見て取れた。

登山開始から2時間が経過した。また落葉で隠れた山道を探し、登り始めた。



登山道開設から20年、手作りの看板が目立つ



落葉で覆われた登山道を呼吸を整えながら登る!!



小休止：眼下の土内川や神室の山肌を眺める

## 突然、火打岳の全容が現る！！

「八合目」と書かれた看板を手に取り記念写真ならぬ「証拠写真」を撮り、又登りだした。ほどなくして「西火打岳」に辿り着いた。進行方向を見上げると、私達の視界に大きな岩山が飛び込んできた。尖峰「火打岳」の雄姿である。

「西火打岳」からは小鞍部に下り、小ピークを過ぎると頂上直下の鞍部への下りとなった。貫禄のある「キャラ木」の下を通り過ぎ、1120m鞍部に降りた。

ここから標高差で118m登れば、目指す火打岳山頂に立つことが出来るのだ。

途中、ロープのあるところ登り詰めると、「板状節理」に砕けたガレ場となった。このガレ場だけが所謂「七曲り」の登山道となっていた。呼吸を整えながら登り、ガレ場が終わり程なくして、私達は神室連峰の縦走路中央にして、その核心部である火打岳山頂に到達した。

時計の時刻は11:40を指していた。登り始めてから、実に4時間（ロスタイムを含む）を費やしての土内口火打新道からの、私達3人だけの初登頂である。

## 火打岳の山頂に立つ柱石

山頂に着いて、背負ってきたザックを肩から降ろした。実に爽快な充実感に包まれた瞬間である。ダイスケ兄弟にとっては、初めての火打岳であり、初めての神室連峰である。早速、三角点の柱石を「モデル」に証拠写真に納まる。

火打岳の三角点の柱石については記録によると、当初は笹谷峠産茄子目石が使用され明治27年に埋標された。その後、改埋され、昭和55年には「一次基準点測量」実施に伴い花崗岩の柱石に交換されて現在に至る。しかし山頂には不思議な、もう一つの柱石が埋設されている。



頂上は近い！、「八合目」を手にするダイスケ君



背後は「西火打岳」から望む火打岳（右のピーク）



不思議な柱石

一等三角点火打岳の柱石を前に証拠写真!!  
しかし、山頂にはもう一つの柱石がある・・・

## 神室連峰の眺望を堪能！！

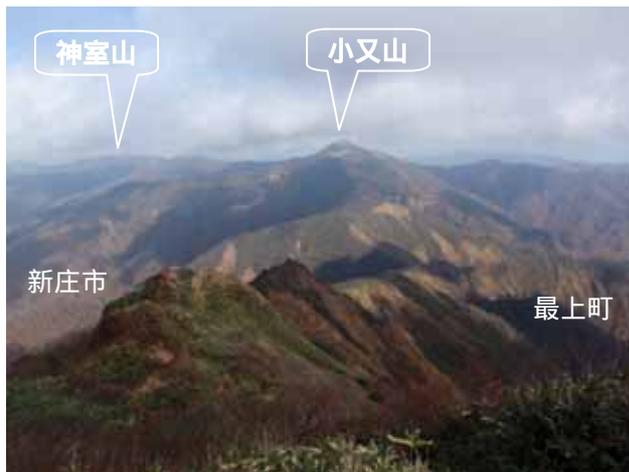
神室連峰は全長 20km に及ぶが、その中央部に位置するのが火打岳である。そこからの眺めは格別であり、絶景である。この日は薄曇りの天候ながら、連峰の両端まで確認することが出来た。

北は連峰の最高峰である小又山（1367m）、主峰である神室山（1365m）には薄雲がかかっているものの、その位置は確認できた。南に視界を転じると、大尺山（1194m）、槍ヶ先（1050m）と主稜線が続いている。木々の枯れ葉を振るい落とした神室連峰の山肌は荒々しく迫力を持って視界に飛び込んでくる。

また西に新庄市、東に最上町の街並をも眺望できた。自分の足で辿り着いた火打岳山頂からの 360 度のパノラマに、ダイスケ兄弟も、その感動と興奮の余韻を全身で感じ取っているようだ。



火打岳山頂でのダイスケ兄弟



「北神室連峰」の眺望を楽しむ



東西非対照の地形が特徴の神室連峰（南方向）

## 昼食にラーメンを食す

「秋の日は釣瓶<sup>つるべ</sup>落とし」と言うように折角登った山頂だが、長居は出来ない。

昼食を摂って、12:30 には下山することにして各自昼食に取りかかった。汗ばんだ体には、稜線越えの風は肌寒く感じられた。山頂直下の風の弱い場所を確保したダイスケ兄弟は同じように、持参した携帯コンロでラーメンを煮ていた。

晩秋の 1000m を超す山頂で食するその味は格別であり、彼ら兄弟の忘れられない味として心に残ることだろう。



窪みの登山道を独り占めしての昼食

## まぼろしの「三角点」

予定通りに 12:30 に下山を始めた。ほどなく「西火打岳」まで下山した。この日の山形市の日入時刻は 16:34 である。日没までに充分下山できる時間的余裕があった。持参した「ガイドマップ」に「西火打岳」に三角点マークがあった。(新設の三角点かな・・・) と思い、「探してみよう!!」と提案し、3人で探し始めた。しかしいくら探しても見つからない。よくその地図をみると標高が 1160m 丁度で少数点以下の記載がない。「なんか怪しい!?!」と感じ「<sup>まぼろし</sup>幻の三角点」の搜索は中止した。



『栗駒国定公園神室連峰登山ガイドマップ』の一部後日、国土地理院の資料で調べたが、「西火打岳」には三角点は存在せず、「標高点」にもなっていなかった。通常三角点の標高は、少数点 1 位まで記載されている。

## 景色を楽しみながら土内口へ下山

急坂であり、帰りはゆっくりと慎重に下山する。「ダイスケ弟」は少し足の膝が「笑い」出してきたと云う。「2.5 合目」まで<sup>くだ</sup>下ると、遅い紅葉をみる事が出来た。そして 14:45 に元の登山口に 3 人とも無事に帰還した。山頂から 2 時間 15 分を要しての山旅であった。(文責：齋藤)



遅い紅葉が小春日和の青空に映える



こんなビックな巨木にも出会ったりして



吐出沢の清水で顔を洗い、汗を拭く兄弟



この吊り橋が山旅の最後です